

二人称的（共感的）関わり — 共創現象を解く鍵

諏訪 正樹*

慶應義塾大学 環境情報学部

Empathic Second-Person Relationship: A Significant Key to Phenomena of Co-creation

Masaki Suwa*

Keio University, Faculty of Environment and Information Studies

* Corresponding Author: suwa@sfc.keio.ac.jp

概要

本稿は、共創現象を紐解く鍵として「二人称的（共感的）な関わり」という概念をあげ、共創を論じるものである。二人称的（共感的）関わりは、人と人のあいだに芽生えるだけではない。人は、新しく遭遇したモノに対して（一方向的な関係ではあるが）共感的な感情を抱くことが多々あるのではないかと考える。そうした関わりは、心が未発達の子供だけではなく、成人にも日常的に芽生える感情であろう。

共創現象の根幹に二人称的（共感的）な関わりがあるとすれば、共創現象を探究するためには、従来の科学の方法論である三人称的（客観的）な立ち位置からの観察だけでは事足りない。自身と対象（それが人であれ、モノであれ）の関係性を一人称視点で観察して記述するという、いわゆる「一人称研究」からスタートし、次第に、自身と対象のあいだに二人称的な関係性が立ち現れてくる様子を探究するという手法が求められよう。

キーワード

共創, 共感, 二人称的関係, 一人称研究, 日常生活における認知

Abstract

This paper raises a concept “empathic second-person relationship” as a key to exploring phenomena of co-creation. That relationship does not just occur between a person and another, but also between a person and a thing/event. We argue that a person frequently obtains a feeling of “empathic second-person relationship”, when he or she has encountered a thing/event for the first time.

Supposing that “empathic second-person relationship” lies in phenomena of co-creation, the conventional scientific method, i.e. objective observation, does not suffice for examinations of co-creation. Regardless of whether the object is a human being or a thing/event, describing the relation between the self and the surrounding world, using the method of *studying on/with first-person's perspective*, may be a good starting point. By doing that, it will become possible to encounter, and thus study, the very phenomenon that empathic second-person relationship comes to appear.

Keywords

Empathy, Co-creation, Second-person relationship, Studies on/with first-person perspective, cognition in daily life

1 はじめに

「共創」を構成する文字が言い表すように、この文言は、複数の人やものごとが互いに交わり、（人が主語になる場合は）折り合いをつけ、新しいものごとが生まれることを指す概念であると筆者は考える。コミュニケーションや多様性が重要なキーワードである現代に

において、改めてこの概念の意味するところを議論し、該当する現象を挙げて探究することには、時代的意義がある。

2 二人称的（共感的）関わり

複数の人やものごとが互いに交わり、折り合いをつ

けるなかから、新しいものごとが生まれるという現象の本質は「二人称的（共感的）関わり」であること、つまり、共創現象の根幹にはそういった関係性が存在していることを、本稿では主張したい。

例えば、転校生が新しい学校に馴染んでいくプロセスを考えよう。転校生から見ると、その学校の（もしくはクラスの）生徒の間では何がよしとされ、何がタブーなのか、最初はわからない。受け入れるクラス側から見れば、どんな性格でどんなものごとが好きな生徒なのか、わからない。お互いに押し引きを繰り返す、その反応から、次第に相手の思考回路や趣向が見えてくる。

どちらのサイドも、自分の主張を全て押し付けるわけでもなく、相手の趣向に完全に言いなりになるわけでもなく、互いに折り合いをつけはじめる。こういう関係性を表現するに適した言葉は、「二人称的（共感的）関わり」[佐伯 2017]であろう。

どちらのサイドも、最初は一人称視点で相手を観察する。やがて、相手の趣向が見えはじめると、自分の一人称視点に相手の視点から見た関係性も混じえて、ものごとを考えるようになる。「あいつは多分、こんなことを考えていて、その考え方もわかる」といった認知である。互いに、赤の他人から勝手知ったる他人へ、互いに共感を覚える相手に昇格するのである。つまり、IとYouの関係性、二人称的（共感的）関わりが醸成される。

重要なポイントは、その段階に至れば、新しい趣向と秩序が形成されているということである。その趣向や秩序は、「共に創った」のである。

詳しくは事例も交えて後述するが、二人称的（共感的）関わりは、それを構成する両者からみて非対称の関係にある。AがBに対して抱く二人称的関わりと、BがAに抱く二人称的関わりは必ずしも同じではないのである。AがBの思考や行動を推し量って「まあその考え方も理解できる」と思っていることと、BがAを推し量って「まあその考え方も理解できる」と思っていることが必ずしも同じではないようなシチュエーションは、社会的には多々存在するであろう。蒟蒻問答という落語はまさにそういったすれ違いの面白さを扱ったことで有名である。

3 共創現象に向き合うための研究方法論

3.1 内側からの観察

共創現象の本質が二人称的（共感的）関わりにあるとするならば、そういった現象を探究する際に必須になる研究手法は、「内側からの観察」であろう。

従来の意味での「科学」はデカルトの心身二元論[デ

カルト 2014]に端緒を發するもので、客観性、普遍性、論理性を是とする[中村 1992]。なかでも、客観性は、観察行為が探究対象に干渉しないことを担保し、対象を第三者的な立ち位置から観察することを意味する。

第三者的な位置に立つということは、複数のものごとが交わり、次第に折り合いをつけていくプロセスに、探究者は関与しないということになる。そのプロセスに自ら関与せずして、そのプロセスのダイナミクスや意味するところはわかりようがない。

上述の例で言えば、クラスでは転校生が馴染んでいくダイナミックなプロセスが生じているのに、元からいた生徒の親はそこには直接関わらない。自分の子どもから転校生がやってきたことを聞き、成績とか、出身地とか、親はどんな方なのかなどの情報を得る。ときには、父兄参観で転校生の様子を観察する。それらの情報と観察を総合して、転校生を表現する幾つかの言葉（ラベル）を考えることになるであろう。ダイナミックなプロセスに現在進行形に身を埋めて、転校生と元からいた生徒の押し引きを身体で感じるのではない。自分が考え出したラベルの合わせ技で、いわゆる「頭で」、転校生を理解しようとする。親（父兄）は、ダイナミックなプロセスを三人称的に観察する外部者に過ぎない。

転校生が馴染んでいく共創現象をしかと探究するには、押し引きと折り合いを肌で直接感じることでできる内側の存在であらねばならない。これは、複雑系科学の分野から生まれてきた、いわゆる「内部観測」の考え方[郡司 1997]である。そういった考えに基づく研究方法論が必須であると考えられる。

3.2 からだメタ認知

筆者は、自分と世界の間を生起しているインタラクションを一人称視点で観察し、記述する認知的行為を、従来の心理学における「メタ認知」と区別して、「からだメタ認知」と呼び、その重要性を提唱してきた[諏訪 2016]。従来型メタ認知が（言語的な）思考内容だけを対象としたのに対し、からだメタ認知の記述対象は、自身の身体動作、環境からの知覚、体内感覚を含めることを重要視している。つまり、一見、言語化とは相容れない対象をも敢えて言葉で記述しようとすることによって、身体知に迫ろうとする。また、そういうものごとを記述対象に据えることによって、自身の身体と環境の関係を一人称視点から捉えることができる。つまり、からだメタ認知は、身体が関わる状況依存的なダイナミクスに迫る有効な手法であると考えられる[諏訪 2016]。

共創現象は、関与する変数や要素を予め特定できないという意味で、実に状況依存的な知である。そういう知のあり様についての知見を得るために、からだメタ

認知のような手法による一人称研究[諏訪ら 2015]は有望であろう。つまり、自身が共創の場を構成するメンバーとして関わり、共創がどのように形成されていくのか、その変容の様を観察するのである。それは、人が生きる現場で生じる、状況依存的な知を対象として、普遍的な知見や仮説を得る前段階として、人の生き様を理解するための新しい視点を提示したり、仮説を立てたりするための研究方法論である。

3.3 対象にしかと向き合うということ

内側にいるからこそ、押し引きの各局面での意味が理解できる。そして、両サイドが相手の何を認め、自分の主張の何を緩和して折り合いが成立したのか、そのきっかけは何だったのかについて、理解できる。第三者的な立ち位置から父兄が得られる情報や観察だけしかないとする、「なぜうちの子があの子と仲が良いのか、さっぱりわからない」ということにもなる。

より一般化して論ずるならば、研究対象にしかと向き合うためには、内側に入り込んで、身体でその対象と（研究者としての自分の）押し引きを経験した方がよいということになる。だからこそ、内部観測的な探究手法が必要になる。

3.4 モノに対する二人称的（共感的）関わり

さて、二人称的（共感的）関係を論じる事例として、先に論じたのは、人と人の関係についてであった。しかし、興味深いことに、二人称的（共感的）な関わりは、対象がモノである場合にも生じると思われる。

佐伯ら[2017]は、自閉症スペクトラムを有する幼児が、小山に向かって投げたボールが自身の方向に転がり戻ってくるシーンに遭遇し、「キャキャッ」と笑い声をあげながら、繰り返し追いかける様を考察している。

この現象の解釈には様々な可能性がある。ボールの動きの何らかの特徴を生まれて初めて見出したことから、その現象に興味を抱き、非常に喜んだと解釈することもできる。これは、ボールの動きという客観的な現象に対して、何らかの主観的な感想を抱いたという見方である。幼児も客観的にモノを観察しているのだという解釈であろう。

一方、その幼児は、ボールに対する共感的な見方を獲得したという解釈もあり得る¹。「共感的」とは、ボールを擬人化して、自身とは別個の存在としての「生き物らしさ」をそこに見出し、予想がつかない動きをその存在が繰り返したことに対して、「お！ 面白い動きを繰り返すやつめ」²と、共感を抱いたという解釈である。佐伯らは、この幼児が、特定の保育士との間に共感的なつながりを構築する以前に、モノに対する共感を覚えた可能性があること[佐伯 2017]を論じている。

人が相手のケースでは、共感が双方向になる場合が多い（相手もこちらに対して共感的な感情を抱く）のに対し、モノが対象の場合は、こちらからモノへの共感という一方向の関係性にすぎない³。しかし、そういった関係性の誕生を想定することが、共創現象を考える上でも非常に有意義なことではないかというのが、本稿の主張の一つである。対象となるモノの存在があるからこそ、その共感的な関わりが心の中に芽生えたとするならば、やはり、その現象はこちらとモノの両者によって創られたと考えるのである。

4 二人称的関わりの一事例：お酒の味わい

モノに対する二人称的（共感的）関わりは、心の発達途中である幼児だけに起こることではなく、成人にも日常的に頻繁に生じる認知ではないかと、筆者は考えている。

例えば、成人がお酒を味わう場合を考えてみよう。お酒の味を客観的に評価しようとする、酸度、糖度、アミノ酸の種類や量、使っている酒米、製法など、誰が観察しても結果が同じになるデータを集めることになる。しかし、そういった情報を総合しても、お酒好きが「味わい」という言葉に込める意味合いとはかなりかけ離れている。そういった三人称的な関わり方では、お酒の味わいに「しかと向き合っている」ことにならないのである[諏訪 2018]。

お酒の味わいにしかと向き合うためには、3章に論じたように、一人称研究を行う（自らの身体で味わうこと）が良い手法である。まずは、お酒好きな生活者としての一人称視点から、お酒の世界を表現することから始

¹ 自閉症の認知に他者や外部は存在しないという考え方が、現在の心理学の主流であることは認識している。しかし、佐伯ら[2017]は、二人称的関わりという見方でこの問題を見ると、異なる解釈もあり得ると論じている。筆者もその見方に賛同する。現に、ここで挙げた幼児は、この転がるボールのエピソードの後、担当保育士だけとは共感的な関わりを結び始める。自閉症的なスペクトラムが少しずつ変容しつつあるフェーズにおいては、モノに対する共感が芽生えても不思議ではないと考えている。

² もちろん、心の中でそんな言葉を駆使するほど、幼児は言語的に発達してはいない。読者が「共感的」の意味を理解しやすいように、比喩的にこう表現したにすぎない。

³ モノが（人間である）こちらに対して共感を抱く認知を有することは現象としてはありえないが、こちらはモノを擬人化しているので、モノがこちらのことをそう考えていると、こちらが感じていることは、こちらの二人称的（共感的）関わりの一部を形成していることは十分にあり得る。

めるのがよい。「自分勝手な主観的な視点からのデータを収集しているだけではないか！」という批判があることは予想に難くない。しかし、そうではない。

お酒の味わいは、身体ではわかっているけれども、なかなか言葉で表現できない暗黙的な知の典型である。味わいをからだメタ認知により言葉にする習慣を続けていると、何が起こるのだろうか？

筆者自身の一人称研究の知見（例えば、[大塚 2016]；[諏訪 2018]）によれば、まずは、自分がどういうお酒が好きで、どういうお酒が嫌いであるかの線引きをしようとする。すなわち、両者を区別するための様々な「味の変数」に気付こうという意識が働く。どんな感触の味の要素が、どのタイミングで、口腔や鼻腔のどこあたりに、どんな速度で出現するか？ 総体としてどんな心的風景が立ち現れ、どんな心地がしてくるか？ そういったことを表現する諸変数を一つずつ分化し、各々に適切なワーディングを探し出すことになる。

筆者は、舌の脇にじつりと残る酸味が嫌いであることには、最初から気づいていた。しかしある時、いつも「残る」という動詞を使っていることを自覚し、マンネリ感を覚えた。よく考えてみると「残る」は、実にアバウトである。残り方にもいろいろ多様な特徴があるはずなのに、その全てを「残る」と表現しているようでは、表現分解能が粗いとフラストレーションが溜まってきたのである。

フラストレーションを抱えたまましばらく味わいを表現し続けていると、「舌の脇が帯電するかのようだ」とか、「降り積もるように静かに溜まっていく」といった新しい表現がふと浮かんだ。からだメタ認知の習慣を継続することは、感じ方の分解能を上げ、それを表現する言葉の分解も上げることになることを示唆する事例である。

この時点では、対象世界を見る分解能が増したとはいえ、いまだ一人称視点の世界に居ることに変わりはない。しかし、しばらくすると、それまでならただ嫌いだと思っていたお酒の味わいに、ある種の共感を覚え始めるという現象が立ち現れたのである。共感と言っても「好き」になったわけではない。完全に好きではないが、「これも許せる」とか「まあ、この酒米でこういう味になるのもわかる」と言い出したのだ。

これは、モノに対する（この場合は、お酒の味わい）「二人称的（共感的）な関わり」が生じた事例であると解釈できるのではないだろうか？ 先に論じたように、お酒はモノなので、相手が主語になって私に共感を抱いてくれるわけではない。あくまでも一方向的ではあるが、私の見方が単なる一人称視点ではなくなり、「相

手の言い分もわかる」という、共感的視点が混ざり始めることが、注目すべき点である。

5 考察

5.1 一人称視点あつての二人称的（共感的）関わり

探究対象にしかと向き合うとは、前節で論じたようなプロセスを経て、相手が人であろうがものであろうが、そういった状態になることではないかと考える。いきなり二人称的関わりが発生するのではない。転校生の事例でも、お酒の事例でも、まずは一人称視点から自分と世界の関係を観察記述することから始めるからこそ、その場を介して、次第に、相手からの視点も混じりはじめる。

一人称視点で記述をしていると、次第に二人称的関わりが生まれてくるのはなぜだろうか？ それは、世界が必ずしも自分にとって「優しい」ものごとばかりではないからではないかと、筆者は考えている。いつまでも一人称視点にしがみつき自分勝手に解釈していると、優しくないものごとには心を閉ざすしかない。しかし、対象世界と自分の間のインタラクションを、優しいことも優しくないことも含めて、その全てをウォッチする環境に身を置くと、（心を閉ざさないとするならば）相手の視点と折り合いをつける以外に生きる道はない。

要は、他ならぬ自己を有して一人称視点で世界と相対することから始めるからこそ、二人称的関わりへモードが切り替わるということなのではないだろうか。これはまさに、ブルナー（J. Bruner）[2002]で論じた、自己形成のプロセスと同じである。

5.2 共創されるものごと

第2節では、転校生の事例で共に創られるものごとを、「新しい趣向と秩序」と表現した。しかし、必ずしも、関与者全員に共通の「趣向と秩序」が生まれるわけではないという点を、ここで強調しておきたい。転校生が馴染んだ暁には、両サイドを一つの秩序がトップダウン的に縛っているわけではない。転校生が馴染んで折り合いがついている理屈が、関与する人それぞれ、別個に醸成されていると考える方が自然である。

ある在校生は、「あの転校生は少々主張が強いところがあるが、今まで中心的存在だった別の生徒の出過ぎたところとうまくバランスをとれることになり、心地よい」と思っているかもしれない。

当の転校生は、「自分は主張が強いと見られがちだが、誰もリーダーシップをとらない時に、押し出されるように強く見せているだけであって、本当に強い主張を持った奴がいる場合は、そいつにある程度任せて、自分

は時々表に出るくらいが一番楽である」と思っているかもしれない。

クラスに転校生がやってきたことをきっかけにして、関与者が各自、互いの関係性に折り合いを見出したとき醸成される秩序は、基本的には各々の心の中に存在し、一部表に漏れ出る要素が互いにバッティングしなければよいだけである。

共創を、「皆で力を合わせて一つのゴールを形成することと考える向きもあると想像する⁴。しかし筆者は、共創をそういう現象とは捉えない。「皆で力を合わせて一つのゴールを形成する」は、佐伯[2017]がいうところの「同感的関わり」（「私たちみんな仲間よね」という関係性）であって、共感的な二人称的関わりとは異なる。

共創とは、互いの存在を活かし、各々が一人称視点で、自分も含めたダイナミックな場のインタラクションを観察しながら、次第に、心の中に二人称的関わりを醸成し、折り合いをつけながら、自分なりの新しい生き方を

見つけることではないだろうか。

参考文献

- Bruner, J. (2002). *Making Stories – Law, Literature, Life –*, Harvard University Press.
- 大塚裕子, 諏訪正樹, 山口健吾 (2015). 創作オノマトペによる日本酒を味わう表現の研究. 第29回人工知能学会全国大会, CD-ROM.
- 郡司ベギオ-幸夫, 松野孝一郎, レスラー オットー・E (1997). 内部観測, 青土社.
- 佐伯胖 (編著) (2017). 「子どもがケアする世界」をケアする - 保育における「二人称的アプローチ」入門, ミネルヴァ書房.
- 諏訪正樹, 堀浩一 (編著), 伊藤毅志, 松原仁, 阿部明典, 大武美保子, 松尾豊, 藤井晴行, 中島秀之 (2015). 一人称研究のすすめ - 知能研究の新しい潮流 -, 近代科学社.
- 諏訪正樹 (2016). 「こつ」と「スランプ」の研究 - 身体知の認知科学 (講談社選書メチエシリーズ), 講談社.
- 諏訪正樹 (2018). 身体が生み出すクリエイティブ, 筑摩書房.
- デカルト (著), 今泉三良 (訳) (2014). 方法序説, 哲学出版会 (Kindle版).
- 中村雄二郎 (1992). 臨床の知とは何か, 岩波書店.

⁴ 認知科学や人工知能の分野において、協働、協調といったキーワードがこれまでに頻繁に登場してきた。それらのキー

ワードに「皆で力を合わせて一つのゴールに向かう」という意味合いを込めた研究も多々あったと推察する。